

Title	明治期虚子俳句 資料と考察：「日盛会句稿」に関連して
Sub Title	Kyoshi's Haiku poems in Meiji times, with particular reference to Hizakarikai MS.
Author	本井, 英(Motoi, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1978
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.37, (1978. 2) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00370001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00370001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 明治期虚子俳句 資料と考察

——「日盛会句稿」に関連して——

本 井 英

## 一、はじめに

本稿は高浜家蔵慶応義塾大学寄託資料の中から二三を紹介しつつ、明治四十一年夏の虚子俳句について、その成立過程等を考察しようとするものである。はじめに高浜家蔵慶応義塾大学寄託資料について梗概を記せば、昭和四十九年七月、鎌倉虚子庵旧蔵になる虚子手沢本約五〇〇点が、高浜年尾氏の御厚意により慶応義塾へ「虚子文庫」〔慶応義塾国文学研究会報〕第七号より目録掲載中〕として寄贈されたのにもない、同じく高浜家蔵の明治期俳句会稿を中心とした約六〇〇点に及ぶ資料が寄託され、これに対し慶応義塾では久保田万太郎記念資金の協力を得て森武之助・星野（清崎）敏郎・本井英らがその整理作業を行いつつあるものである。

## 二、資 料

本稿では前記寄託資料中より、Ⅰ「日盛会句稿 第一回分」、Ⅱ「虚子出句控」〔資料Ⅰに該当する部分〕、Ⅲ「自選類題虚子句集 草稿」〔資料Ⅱに該当する部分〕の三点を翻刻紹介する。

I 「日盛金句稿 第二回」

本資料は半紙袋綴、表紙二丁本文一七丁及び成績表一葉を紙綴にて仮綴したものである。表紙（写真1参照）には日付、当日席題等のほかに席題に因んだ絵が描かれてあるが、筆者は参加者中の岡本齋三酔かと思われる。

本文は前後二部に分かれており、前半九丁は清記稿（各自の出句をアトランダムに列記し、運座中を回覧され各参加者の選句に供せられるもの）、後半八丁は各参加者の選句稿である。また前半と後半の間には四三二字詰（24×18）原稿用紙一葉が綴込まれていて、当日句会の成績表が記されている。

日付は明治四十一年八月一日、場所は不明（虚子庵あるいは寒菊堂―松浜居）。参加者は虚子・東洋城・松浜・蛇笏・齋三酔・三九・香村・水巴の八名。出句合計九四句（各自平均二一句強となり、同数出句ではなかったことが分かる）。選句合計六八句（水巴一一句、東洋城九句、他はすべて八句を選んでいる）。席題は「時鳥」である。

凡例（資料I〜III共通）

- 1 漢字の字体については出来るだけ改めぬよう心がけたが、二三現行のものに改めたものもある。
- 2 仮名の字体については、すべて現行のものに改めた。
- 3 濁点及び振り仮名は原本通りとした。
- 4 以下の考察の便を考えて資料中の各句に1・2・3……（資料I）、A・B・C……（資料II）、イ・ロ・ハ（資料III）等の番号・記号を施した。
- 5 資料I清記稿各丁には回覧の済んだ旨を表わす番号略記があるが、これは省いた。
- 6 資料I清記稿に○印の施されている句があるが、選句された点数を示すものであるので省かずに残した。またそれらの句の下には、出句者の番号あるいは略号が記されているので、同じく残した。
- 7 資料I選句稿の各句には出句者名を示す朱筆があるが、それらは略号のまゝ残した。
- 8 資料I選句稿にはいくつかの抹消句があるが、それらは判読して右側に傍線を施し抹消句たることを示した。
- 9 資料Iの各丁右あるいは左端に「○、3、4」等の数字が記されているが、清記稿の順番を示すものと考えて残し

た。

10 資料Ⅱの各句は「考察」で述べるごとく字体の大小があるが、それらについては写真2を参照していただくこととして資料の翻刻に際しては配慮しなかった。

11 資料Ⅱ・Ⅲ各句上部に記された朱点等については「考察」中、「発表過程」の項に示したので「資料」では省いた。



(写真 1)

四十一年八月一日

日盛会

第老会々稿

時鳥

- 1 時鳥竹帛にたるゝ名を惜め
- 2 祥月の日割書く僧や時鳥
- 3 釣れ盛る兩岸の人や時鳥
- 4 六歌仙二人坊主や時鳥
- 5 時鳥落柿舎に去来なき世かな
- 6 時鳥啼く時国土皆活きたり
- 7 夜の戸に紫陽花白し時鳥
- 8 海よりもひくき城市や時鳥
- 9 将門が月見る面や時鳥
- 10 時鳥青桐の空降りぬべし

虚子

1才

癖三醉



- 39 むさし野に人住める灯や時鳥
- 40 市音を驟落し啼くや時鳥
- 41 渡し守は笠やは著寐ん時鳥
- 42 時鳥磯打つ波に絶間かな
- 43 出羽様の奢り語り語らん時鳥
- 44 時鳥きくや剝製の時鳥
- 45 山の井を夜吸ふ僧や時鳥
- 46 的の灯の晝白し時鳥
- 47 森に住む小鳥どもやな時鳥
- 48 荷船出して浪高き夜や時鳥
- 49 時鳥瑠璃なる空の火雲かな
- 50 堤行くは寺に行く灯か時鳥
- 51 時鳥待つ若者の茶番かな
- 52 水軍の酒を煮る火や時鳥
- 53 時鳥不死の薬を煉る夜かな

⑤

蛇

』  
4ウ

- 65 山の端の蹴落し月や時鳥

』  
6ウ

東

蛇

- 61 鱧搔く竿の長さよ時鳥
- 62 高草に窓明りすや時鳥
- 63 難船の絵馬の巨濤や時鳥
- 64 けさ降るは虎か雨とよ時鳥

東 香 癖

水 虚

- 60 庭先に塚ある宿や時鳥

松ヒン  
』  
6オ

虚

- 59 本陣に槍三本や時鳥
- 58 今一度引締める帯やほととぎす
- 57 み佛の夢もさましつ時鳥
- 56 ほととぎす禁酒の顔に月明し

香

』  
4オ

東

⑥

』  
5ウ 5オ

虚<sup>注1</sup>水

- 54 歌の事にいさかふ公卿や時鳥
- 55 大崩れを湧く雲に飛ぶ時鳥

蛇 水

- 66 乾坤にくだけし濤や時鳥
- 67 時鳥明け残りたる雲一抹
- 68 籤戦き湖見ゆる時鳥
- 69 時鳥大きな水泡消えにけり
- 70 時鳥目には貴船の鳥居哉
- 71 群盲の評する古器や時鳥
- 72 木曾紀行昼時鳥きつと鳴く
- 73 灯めく晴間の星や時鳥
- 74 水塞の旗祭すやほととぎす
- 75 時鳥賊船逃ける晴間哉
- 76 鴉さへ深山鴉にほととぎす
- 77 時鳥ゲソと水減る大河哉
- 78 陣中に父の衷にみつ時鳥
- 79 樓の下は河前は山時鳥

⑦

東

7ウ

- 89 疎林出る水車の月や時鳥
- 90 ほととぎす天メの真杉の命哉

山宿<sup>注3</sup>

東

9オ

虚

- 87 時鳥春日の鹿の寐ぼけ月
- 88 ほととぎす我立杣を湖に

虚<sup>注2</sup>東

へキ

- 84 我にしばし宵寐ゆるせや時鳥
- 85 時鳥火山の舌の見ゆる哉
- 86 笠島や果てなき月の時鳥

蛇松

⑨

7オ

8ウ

虚

- 83 寸莎きればことつく馬や時鳥

⑧

8オ

蛇笏

- 80 病める師が一世の舞や時鳥
- 81 時鳥門たがへ来し使哉
- 82 薪負ふて雲ふみ下る時鳥

香水

(出句者名)

水	松	東	虚	蛇	香	三	癖		
巴	濱	洋	子	笏	村	允	三	水	巴
	○	○○	○○			○○	○○	蛇	笏
○	○	○○			○○	○	○	松	濱
○○		○○	○○				○	東	洋
○○	○		○○	○○			○○	癖	三
○	○	○○	○	○○	○		○	香	村
		○○	○○	○	○	○	○	三	允
		○○	○○	○	○			虚	子
八	七	十五	十二	七	五	五	九		

(選句者名)

- ○○ 94 細い川の長い筏やほととぎす
- 93 鎌ダコを削る薄刃や時鳥
- 92 水守るいくさ心やほととぎす
- 91 行燈破れ灯の舌見ゆる時鳥

東 癖  
9ウ

- 89 疎林出る水車の月や時鳥
- 87 時鳥春日の鹿の寐ぼけ月
- 85 時鳥火山の舌の見ゆるかな
- 82 時鳥ふて雲ふみ下る時鳥
- 81 時鳥門たがへ来し使かな
- 70 時鳥目には貴船の鳥居かな
- 3允せん
- 28 鮎かけに日さゝぬ溪や時鳥
- 8 海よりもひくき城市や時鳥
- 87 時鳥春日の鹿の寐ぼけ月
- 66 乾坤にくだけし濤や時鳥
- 65 山の端の躰落し月や時鳥
- 60 庭先に塚ある宿やほととぎす
- 56 ほととぎす禁酒の顔に月明し
- 52 水軍の酒を煮る火やほととぎす

虚子選

東 蛇 香 虚 松 癖 東 癖 東 松 香 蛇

10ウ

10オ

6 時鳥鳴く時国土皆活きたり

虚

癖三醉

┌  
11才

18 講堂を出てはく沓や時鳥

虚

55 大崩れを湧く雲に飛ふ時鳥

蛇

47 森に住む小鳥どもやな時鳥

虚

60 庭先に塚ある宿やほととぎす

松

48 荷船出して浪高き夜や時鳥

水

63 難船の絵馬の巨濤や時鳥

東

香村選

60 庭先に塚ある宿や時鳥

松

68 簀そよぎ湖見ゆる時鳥

蛇

65 山の端の蹴落し月や時鳥

東

80 病める師が一生の舞や時鳥

水

87 時鳥春日の鹿の寐ぼけ月

東

81 時鳥門たかへ来し使哉

香

94 細い川の長い筏やほととぎす

癖

┌  
13ウ

12 時鳥犬ひきて土手をありきけり

三

18 講堂を出て穿く沓や時鳥

虚

55 大崩れを湧く雲に飛ふ時鳥

蛇

49 時鳥ルリなる空の火雲哉

蛇

52 水軍の酒を煮る火や時鳥

蛇

49 艦うけてうねり長さや時鳥

東

54 歌の事にいさかふ公卿や時鳥

水

┌  
12才

┌  
12ウ

45 山の井を夜吸ふ僧や時鳥

虚

47 森に住む小鳥どもやな時鳥

虚

34 宿かさぬ里の月夜や時鳥

水

28 鮎かけに日さゝぬ溪や時鳥  
 61 鰻うなぎ擡く竿の長さよ時鳥  
 56 時鳥ときどり禁酒の顔に月明し  
 66 乾坤に砕けし波や時鳥  
 94 細い川の長い筏や時鳥  
 85 時鳥火山の舌の見ゆる哉  
 東洋城セン  
 松濱選  
 63 難船の絵馬の巨瀉や時鳥  
 65 山の端の蹴落し月やほととぎす  
 54 歌の事にいさかふ公卿や時鳥  
 39 むさしのに人住める灯や時鳥  
 37 時鳥なくや清女がうしろむぎ  
 6 時鳥なく時国土皆活きたり  
 52 水軍の酒を煮る火や時鳥

松  
 〱 14オ  
 東 東  
 水 水  
 水 水  
 虚 〱 15オ

66 乾坤にくだけし瀉や時鳥  
 76 鴉さへ深山鴉にほととぎす  
 85 ほととぎす火山の舌の見ゆるかな  
 56 ほととぎす禁酒の顔に月明し  
 62 高草に窓明りすや時鳥  
 65 山の端の蹴落し月や時鳥  
 71 群盲の評する古器や時鳥  
 27 木曾紀行屋時鳥きつとなく  
 78 陣中の父の衷にゐつ時鳥  
 78 笠寫や果てなき月の時鳥  
 92 水守るいくさ心や時鳥  
 94 細い川の長い筏や時鳥  
 9 将門が月見る面や時鳥  
 14 川止めの舟つなぐ岸や時鳥  
 21 捲き上し簾の空解や時鳥  
 28 鮎かけに日さゝぬ溪や時鳥

松  
 〱 15ウ  
 虚 癖  
 水 東  
 〱 16オ  
 癖 三  
 香 松

蛇笏妄選

水巴選

- 61 鯁かく竿の長さよ時鳥
- 70 時鳥目には貴船の鳥居かな
- 74 水塞の旗祭すや時鳥
- 92 水守るいくさ心や時鳥
- 84 我にしはし脊麻ゆるせや時鳥
- 13 黄金の宝鐸やある時鳥
- 15 時鳥草加泊りにきくにけり
- 18 講堂を出てはく沓や時鳥
- 26 時鳥なくやランプを明るくす
- 35 時鳥宇治から奈良へとひにけり
- 42 時鳥磯打つ浪に絶間かな

写真注、表紙図案は㊦の句によるか。

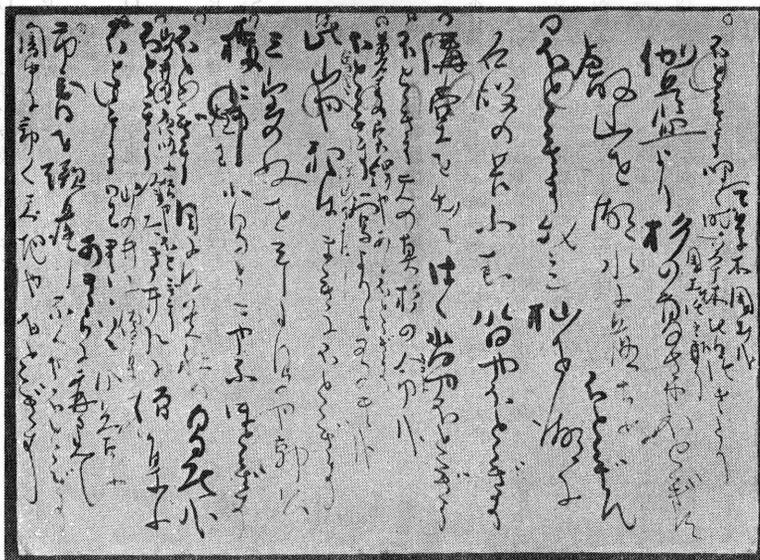
『 16ウ

注1・2はペン書き、後に施されたものか。  
注3、(山宿)として一句の上部に記されていたが、詞書と考えて行を改めた。

II 虚子出句控

本資料は半紙袋綴、表紙一丁本文八二丁(内六丁は原稿用紙、また末尾四丁は上半のみ存し、下半は損失して現存しない)よりなるもので、表紙に「四十一年自春至秋」と墨書され、右脇にペン書きにて「四〇年交る」と注記されたものである。後に考察する如く、俳句会に出席した虚子が、当日の席題に従って句を案じ、その順に筆記且つ推稿した様子が一目瞭然するものである。以下「時鳥」の題のもとに記され、資料Iの句会稿に該当する部分即ち十五丁の表裏を翻刻する。

東 三 三 虚 三 松 東 癖 虚 癖  
 『 17ウ



(写真 2)

- て草木国土哉
- A ほととぎす鳴く時草木皆活きたり  
国土皆活きたり
  - B 伽藍より杉の高さやほととぎす  
 叡山を湖水に落ちぬほととぎす
  - C ほととぎす我立柚を湖に
  - D 石段の苔ふむ香やほととぎす
  - E 講堂を出てはく沓やほととぎす
  - F ほととぎす天の真杉の命哉  
命哉
  - G 黄金の宝鐸やあるほととぎす
  - H ほととぎす鷺よりも多き哉
  - I 鳥さへ——深山からすに——
  - J 此山や鴉はまれにほととぎす
  - K 三宝の書をみしる鳥や郭公
  - L 森にゐし小鳥ともやなほととぎす  
住む
  - M ほととぎす目には貴船の鳥居哉
  - N

O 山の井を夜吸ふ僧やほととぎす

P ほととぎす冷たき井戸に僧集ふ

山の井に僧集ふかな

Q ほととぎす星またゝいて風苔ふ

あきらかに森黒し

R 市音を驟落しなくやほととぎす

S 闇中に動く天地やほととぎす

』  
15ウ

### III 「自選類題虚子句集」草稿

本資料は「ホトトギス」第一七巻四号（大正三年一月一日発行）の附録として掲載された「自選類題虚子句集」の草稿と思われるものであって、袋綴半紙本一九冊からなる。以下朱書による表紙題号ならびに本文丁数を記せば、

「新年之部」一四丁。「春（時候）」二二丁。「春（天文）」二五丁。

「春（地理）」一三丁。「春（人事）」三三丁。「春（動物）」三〇

丁。「春（植物）」五五丁。「夏（時候）」一九丁。「夏（天文）」二

二丁。「夏（地理）」一七丁。「夏（人事）」四五丁。「夏（動物）」

三〇丁。「夏（植物）」四三丁。「秋（時候・天文・地理）」六八丁  
「秋（人事）」二四丁。「秋（動物）」二三丁。「秋（植物）」五二  
丁。「冬（時候・天文・地理）」四五丁。「冬（人事・動物・植  
物）」七二丁。

となる。

「自選類題虚子句集」について虚子は「虚子句集」は今一度目  
を通せば半分にも三分の一にでも減らせるのでありますが、私  
は態々目を通さないで上に〇印をつけた奴を其儘人に謄写しても  
らって一句をも増減せず載せることに致しました。私は頻りに自  
分の句を抹殺し／＼して大事を取るやうなさういふ真似は出来な  
い男でありまして、善悪共にさらけ出す主義であります。私は自  
ら此のうちに自分の真面目を見出し得ることゝ信じて居ります。

唯餘り多くなるのを恐れましたから明治二十六年の最初の句作  
から四十一年迄に止めて置きました。唯草稿を輯めることが不完  
全でしたから随分遺漏はあることゝ考へます。諸君に於て御氣の  
つかれた脱漏の句がありましたら御面倒ですが、御教示を煩し度  
う存じます。「……併し虚子句集はあれでも二十年近い私の労作  
の報告なのでありますから、いかに貧弱なものであるにしても今  
回はこれだけで満足していただき度いと思ふのであります」（ホト

トギス一七卷四号「讀者諸君」と述べているが、明治四十一年、俳書堂から上梓された「稿虚子句集」が今村一声の編になるものであったのに対し本書に「自選」と銘うつている点とも考え合せ、虚子のなみなみならぬ自信のほどを窺うことが出来る。

本稿では、この草稿本中資料Ⅰ及びⅡに該当する部分即ち「夏（六冊の内）動物」の二九丁表及び裏の一部を翻刻する。イロハ…の記号の上に付された○印は、原本では朱にて施されたものであるが、これらは「自選類題虚子句集」二九頁上段。「時鳥」の項、六句目から十一句目と順序共に一致する（ハ・リ「ほととぎす」を「ほととぎす」。ト「時鳥」を「ほととぎす」。チ「哉」を「かな」等の改訂はなされている）。

イ 時鳥啼くとき国土皆活きたり  
 ○ロ 時鳥我立袖を湖に

四一

三、考 察

日盛会

日盛会とは明治四十一年八月一日から三十一日に至る一ヶ月間、ほぼ毎日（八月十四日には「蕪むし会」なる俳句会が催されてお

○ハ 講堂を出てはく杵やほととぎす

ニ 時鳥天メの真杉の命哉

ホ 黄金の宝鐸やあるほととぎす

ヘ 此山や鴉はまれにほととぎす

○ト 森にすむ小鳥どもやな時鳥

○チ ほととぎす目には貴船の鳥居哉

○リ 山の井を夜吸ふ僧やほととぎす

ヌ ほととぎす星あきらかに森黒し

○ル 市音を蹶落し啼くや時鳥

ヲ 闇中に動く天地や時鳥

四一

（以下略）

『 29ウ

『 29オ

り、日盛会は開かれなかったと思われる) 麴町区富士見町なる虚子庵(ホトトギス発行所)及びその隣家なる寒菊堂(岡本松浜居)にて催された俳句会の名称であるが、その句稿の抄録(五五句)を「ホトトギス」一二巻一号(明治四十一年十月一日発行 附録に掲載)するに際して「俳諧散心」なる題号を与えたことから「俳諧散心」あるいは「第二次俳諧散心」(大野林火「ホトトギス外俳壇史」等)とも呼ばれていた。「年代順 虚子俳句全集」第二巻(昭和十五年六月 新潮社)では、明治四十一年目次の項で「日盛会」、本文では「俳諧散心」「日盛会」という扱いがされており、このことから虚子は「俳諧散心」の中の一つとしての「日盛会」と考えていたことが分る。因に所謂「俳諧散心(第一次俳諧散心)」について触れておこならば、それは虚子自身も言う如く「碧梧桐の俳三昧に対抗し日に行われたことから「月曜会」とも呼ばれた。また第一回目の席題が「草芳し」であったことから謄写版刷の高点句集を『芳草集』と題している。この「俳諧散心」については「ホトトギス」一一巻一号(明治四十一年十月一日発行)に抄録が掲載されている。

以下に『年代順虚子俳句全集』第二巻及び高浜家蔵慶応義塾大学寄託資料等より知り得る「日盛会」の概要について表として示す。

日付	場所	席題	参加者
八月一日		時鳥	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・三尤・香村・水巴・以上八名。
二日	虚子庵	蠅	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・三尤・以上六名。
三日	寒菊堂	撫子	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・以上五名。
四日		蓴	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・江戸庵(出句のみ)以上六名。
五日	虚子庵	虫干	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・鳴雪・以上六名。
六日	寒菊堂	心太	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・知白・蘿月・以上七名。
七日	虚子庵	夏の海	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・三尤・知白・以上七名。

廿四日		秋の風	虚子・三允ほか。
廿三日		墓参	虚子・癖三醉・眉月ほか。
廿二日		仲秋	虚子・東洋城・蝶衣ほか。
廿一日		秋の山	虚子・癖三醉ほか。
廿日		踊	虚子ほか。
十九日		霧	虚子・癖三醉・蝶衣ほか。
十八日	資料なし。		
十七日		冷か	虚子・松浜ほか。
十六日	寒菊堂	草合	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・三允・香村・一樹・眉月(出句のみ) 以上九名。
十五日	虚子庵	行水	虚子・松浜・蛇笏・癖三醉・三允・眉月・一樹・以上七名。
十四日		当日は蕪むし会の為中止か。	
十三日	虚子庵	百日紅	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・眉月・以上六名。
十二日	寒菊堂	ははき木	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・眉月・以上六名。
十一日		金亀虫	虚子・東洋城ほか。
十日		羽拔鳥	虚子ほか。
九日	虚子庵	夕立	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・知白・以上六名。
八日		日盛	虚子・東洋城・松浜・蛇笏・癖三醉・三允・知白・以上七名。

廿五日		盃	虚子・蝶衣ほか。
廿六日		朝顔	虚子・癖三酔ほか。
廿七日		芋	虚子・癖三酔ほか。
廿八日		初汐	虚子・東洋城・癖三酔ほか。
廿九日			資料なし。
卅日			資料なし。
卅一日	月		虚子・香村ほか。

表中参加者名を通覧するとき、虚子・東洋城・松浜・癖三酔・蛇笏の出席率がすこぶる良いことが判る。また蛇笏の証言（『対談近代俳句』桜楓社）によれば、ある程度「人を制限して」催されたいらしい。真夏の極暑の日々を同じような顔ぶれで一ヶ月もの長い間毎日開催された目的は何処にあったのだろうか。「第一次俳諧散心」について言えば、前記の如く「碧梧桐の俳三昧に対抗して」ということからホトトギス内の所謂虚子派が糾合して催された訳であったが、盟主と目される虚子がこの明治四十一年夏の段階で果してどの程度俳句あるいは俳壇への情熱を持っていたか、それはやや疑わしい。明治四十年三月に初めての小説『風流懺法』を書き、つづけさまに『斑鳩物語』、『大内旅宿』と発表し、翌四十一年一月に有名な漱石の序文を得た小説集『鶏頭』を上梓して小説家としての自信を得つつあった虚子にとって、最早俳句あるいは俳壇に対して未練は無かったに違いない、蛇笏の証言によれば日盛会最終日の八月三十一日には虚子の俳壇引退・小説専心が宣言された訳だが、だとすれば日盛会開催の目的もその点と深く関わっていなければならぬ。結論めいたことを述べれば、日盛会開催の目的は東洋城以下虚子無き後の所謂虚子派俳壇を担うべき作家の育成ということではなかったのか。小説に専心することになった虚子は明治四十一年十月、国民新聞文芸部創立にあたって部長として赴き、その虚子に代って東洋城が国民俳壇選者として迎えられ、碧梧桐一派の新傾向に対して伝統派の孤塁を守ることになる。東洋城にかぎって言うならば選者と

して一人立ちして行く為の最後の鍛錬の場が日盛会であったと言えるのではないだろうか。勿論未解決の問題も多い。例えば碧梧桐の『続春夏秋冬』に対抗して東洋城を選んだ『新春夏秋冬』（明治四十一年六月刊）に対する虚子の不満（「ホトトギス」一一卷一一号『新春夏秋冬を読む』）、「ホトトギス」に於て十月から（翌四十二年七月まで）始められた虚子選雑詠欄の設立、等々。また東洋城以外の参加者についての細かな検討も必要であろう。従つて日盛会開催の目的については未だ結論を述べる段階に到らない訳だが、本稿では日盛会参加者の顔ぶれから考えられる指摘を以上試みた。

次に「日盛会 第一回」句稿（資料Ⅰ）と「ホトトギス」誌上の抄録について触れておく。前記の如く「日盛会」については「ホトトギス」一一卷一号（明治四十一年十月一日発行）に、その抄録が掲載されている訳だが、第一回については

⑥6 乾坤に砕けし濤や時鳥 癖三酔

⑥3 難船の絵馬の巨濤や時鳥 東洋城

④6 山の井を夜吸ふ僧や時鳥 虚子

の三句が掲載されている。各句に施した番号は資料Ⅰ中の連番（筆者の施したもの）であるが、これらは必ずしも俳句会で賛成者の多かった句（所謂高点句）というのではない。試みに俳句会で四点、三点を得た句を左に掲げるなら

四点

⑥5 山の端の颯落し月や時鳥 東洋城

三点

④8 講堂を出てはく杳や時鳥 虚子

②9 鮎かけに日さゝぬ溪や時鳥 松浜

④0 庭先に塚ある宿や時鳥 松浜

④6 乾坤にくだけし濤や時鳥 癖三酔

⑧ 時鳥春日の鹿の寐ぼけ月

東洋城

⑨ 細い川の長い筏やほととぎす

癖三酔

ということになる。つまり前掲三句のうち、高点句ということからは⑨の句のみが該当するに過ぎず、⑩の句は癖三酔、松浜の二名が賛成しているだけであるし、⑪の句は東洋城一人のみが賛成している句である。また必ずしも虚子が句会で選んだ句というのでもない。⑫の句は虚子自身の句であるから別としても、⑬の句について虚子は点を入れていない。選句の眼というものは、俳句会に於ける場合と雑誌に掲載する場合とは必ずから異なるものではあるが、「ホトトギス」抄録の句からのみ「日盛会」を論ずるのは危険であることがよく分かるのである。

### 虚子の作句過程

資料Ⅱは虚子が「日盛会 第一回」に出句するにあたって、予めその作句を記したものと断定される。なぜなら例えばMの句（資料Ⅱ・写真2参照）は初案では「あし」とあった部分を後に「住む」と改作されていて、句会稿（清記）には「住む」（⑭）形で記されている点、Aの句は「鳴く時草木皆活きたり」が初案であったのに句会稿では改作の形「国土皆活きたり」（⑮）と記されている点等々からである。

そこで以下に資料Ⅱが記されていた過程（即ち虚子の作句・推稿過程にほかならない）について、もとより推察の域を出ぬものはちがいないが、考察を試みる。

まず、字体の大きさ等から考えるとき、通常、野の無い半紙のようなもの一葉に未定数の句を書き連らねて行く場合、ある程度の句数を越えてからは残余の紙幅を考慮して字体は次第に小さくなつて行くと考えられる。そしてもし半紙の左端に至つても、未だ書き記すべき句があった場合には、比較的行間にゆとりのある部分を捜して、そこへ小さな字体で書き込んで行くのが自然である。さて本資料の場合には、B・C・D・E・F・K・L・Mの各句は比較的大きな字体で伸び伸びと記されているのに対し、A・G・H・I・N・

P・Q・R・Sの各句はやや小さい字体で記され、J・Qの二句に至っては非常に小さな字体で、なんとか書き込まれているといった様子である。特にJの句「深山からすに——」の「——」の部分は本来「ほととぎす」と記すべき処を、あまりに狭い行間に記そうとした為の略記と考えられる。そこで本資料の筆記順序について原則的に次の如く考えられないだろうか。つまり全一九句(改案・傍案は一応まとめて考える)は字体の大きさから考えて、大凡三つのグループに分けることが出来、それらは字体の大きいものから小さいものへと記された。また同一グループ内では、より右に位置する句が筆記にあたって先行した(A及びG・H・I・Jの各句については例外——後述——)。とすれば、本資料に於てまずはB・C・D・E・Fの順で句が案じられ記されたと考えられてくる訳であるが、この点について各句の内容を検討しながら句作の脈絡を辿ってみよう。

Bの句は「伽藍」と言うからには、ある程度以上の規模の寺院と、「伽藍」を庄する如く生い茂る「杉」木立を想起し、その空を駆ける「ほととぎす」を点出した句である。この句からだけでは虚子の脳裡に、具体的にいかなる場所が思い浮かべられていたか知ることはできない。しかし次のCの句に目を移すとき、それは比叡山延暦寺であったことが分かる。虚子は前年の明治四十年三月、約一週間に亘って比叡山東塔及び横河に滞在していた。このことは写生文『叡山詣』に詳しく、また小説『風流織法』が横河での経験をもとに執筆されていることは周知のことである。虚子の比叡山滞在は前記の如く三月であつて、時鳥が啼こう筈も無いのであるが、虚子にとつて深く印象されていた比叡山の景に時鳥の啼く様を想像すること位は何の造作も無いことであつたに違いない。

例えば「急な石段を登ると文珠楼が杉の老木の中に建つて居る」(『叡山詣』根本中堂)、「寐床を出て齒磨楊枝を使ひながら湖水の見える部屋に行つて見る……湖水と思はるゝ辺は雲許りで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下ろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になって居るので我が眼より稍々高く稍々低く数知れぬ杉の梢が鉾のやうに突立つて居る……琵琶湖の上にはまだ漢々たる白雲が漂うて居る。杉の梢を流るゝ霞は少しづゝ薄らいで来てだんだんと谷深く見えて来る」(『叡山詣』鳥の聲)にはB・Cの句の背景となる比叡山の景が記されている。

Dの句はCの句の改作と考えられる。即ちCの句の「叡山」の語が少々具体的過ぎると考えてか、「叡山」と言わずに「叡山」を表

わすめものとして「我立杣」の語を着想した（慈円の「おほけなく浮世の民におほふかなわがたつ杣に墨染の袖」によるか）訳だ。

Eの句も、やはり比叡山の印象による。「面白いは色々々の苔のある事だ。葉の廣いのもある。髯のようなものもある。高い枝からぶら下って居るものもある。切株から舞上っているものもある。杉の大木も檜の大木も土も石も悉く苔に包まれて居る。一つの苔の上に他の苔が生えて居る。白い苔の下に黒い苔が食み出して居る。北谷は苔許りで出来てゐるやうだ。」（『叡山詣』賑やかなる山上）の一文からも虚子にとって比叡山の「苔」が印象的であつたことが分かる。B・C・Dと比叡山の記憶を辿りながら句作して来た虚子の連想が「苔」に及ぶのは至極当然のことと言えるだろう。

Fの句では、Eの句中の「杳」を軸として連想が展開して行く。「苔の石段」を踏んで来た「杳」は、いつしか講堂の前に揃えられたものとなり講堂から退出して来た人物によって履かれる。「露聲和尚の案内で大講堂の内陣に這入って見る。中堂よりは明るいながらも暗い。本尊は文珠で、其の左右に高座がある」（『叡山詣』賑やかなる山上）の文は前出「北谷は苔許りで出来てゐるやうだ」の記事から僅か二行（『定本高浜虚子全集 第八卷』一二九頁）を隔てて現れるもので「苔の北谷」へ散策に赴いた虚子は、その足で大講堂を見学しているのである。これによって「石段の苔」から「講堂」への連想は、まったく虚子の一体験に根ざしているということが理解されるだろう。

以上の如くB・C・D・E・Fの各句について内容的脈絡は辿れたと思われるので、以下同じように原則的に考えられる句作順序に従って、それぞれの句の内容を検討しつつ作句過程を考察する。

K・L・Mの三句については比叡山が、その連想の基であるとは必ずしも言えない。しかし「此山や」「三宝の」の語からは、やはり比叡山乃至高野山（虚子は明治四十年五月、高野山にも赴いている）のような場所の記憶が働いているようにも思われる。

N以下の句が小さい字体で記されているのは紙幅の残余を考慮してのことと考えられる。

Nの句は「貴船の鳥居」の語から、いつのこととは定められぬものの京都に於ける記憶による句であることに間違いない。

Pの句は次に記されたものである。初案「冷たき井戸」とあつたところを「山の井」と改作することによって周囲の景への広がり

与えられ、且つ「冷たい」と言ってしまったのは一句が浅くなる、即ち説明をしているような感じになつてしまふ為であらう。

Oの句は、Q以下の句が記された後のある時点でPの句の改作として案じられた為非常に小さな字体で記されるようになってしまった。Pにひき続いて案じられたものであるならばPの左側に記すのが自然であらう。Oの句では「僧集ふかな」とあつたものを「夜吸ふ僧」とすることによって僧とすることによって僧の姿態が、より適確に表現され、また一句中の時刻が提示された。Q以下の句が時間を夜と定めていることの影響が、PからOへの改作に関与しているのではないかと思われる。

Qの句は時刻を夜と想定して「星」が詠み込まれた。しかし初案の「風答ふ」は一句として、やや唐突な表現であることから、「森黒し」と改作したのだらう。こうすることによって「あきらかなる星」と対称的に「暗い森」の輪郭が描かれ、時鳥の甲高い声のみが闇を移動して行くさまが生きて表現されることになる。

Rの句に至つても、夜の印象はなおも続いている。鬱勃と湧き上る夜の市音を遥かに見下ろしながら悠々と駆り行く時鳥が詠まれている訳だが、注意したいのはこの句を詠む時の視角である。つまり市の中から上空の時鳥を仰ぐという視角では「蹴落しなく」の表現は無理であつて、時鳥と同じ高度から市音を見下ろす視線が必要となる。市中の喧騒に対する上空の静寂を捉えつつ詠まれているということだ。丁度比叡山の山上から京都の街を見下ろすというような視角が最も適當であると考えられるのである。

Sの句にも同じ視角がある。そして山あるいは空の静寂と街の喧騒、それぞれの世界に於ける、もろもろの営み、動きといったものを観念的に捉えた表現が「動く天地や」である。つまりRからSへは観念的表現への移行という脈絡で考えられるのではないだろうか。

Aの句は半紙の右端に位置してはいるが、記されたのはSの次であると思われる。Sまで記した後にAの句が案じられた。ところが既に紙幅は尽きていたので、余裕をもって書きはじめられたBの句の右側にある余白に記されたのであらう。内容的には、Sの句の「動く天地」の語から「森羅万象」「山川草木」といった語による世界把握の方向が辿られ、仏語（虚子の謡曲への理解という点を勘案すれば直接的には謡曲からと考えるべきか）である「草木国土悉皆成仏」「草木国土有情非情」等の句が想起されたのだ。しかも

「皆活きたり」の句形にはSの句に於ける「動く」の語への照応も見られ、また「草木国土」の語には帝都鎮護・国家鎮護をその重要な役割として担う比叡山延暦寺の佛が揺曳していると思われる。

G・H・I・Jの各句については触れなかった。G・H・Iの字体の大きさはP・Q・R等と同じ程度であるので原則的にはP・Q・R等の句に先行して記されたことになるのが、半紙を二ツ折りにして使用した場合には折端という書きづらい場所にあたることなどを考え合わせると、原則通りには行かぬかも知れぬという点だけを付記しておく。

以上冒頭に述べた如く、推論の域を出ぬのではあるが、全体的に見ると「時鳥」の句を案ずるにあたって、虚子は終始比叡山の印象というものを軸としながら連想を働かせていたらしいことが分かるのである。

### 発表過程

次に「虚子出句控」(資料Ⅱ)に於て成立した各句の「日盛会句稿」(資料Ⅰ)、「自選類題虚子句集草稿」(資料Ⅲ)、『年代順虚子俳句全集』等への発表過程について考察したが、紙幅の関係で表に示すにとどめ、注記を付す。

清記番号 「日盛会」	句控 朱点	句控 墨点	句控中記号	
			右	左
			A	
⑧	○	○	中	左
			B	
			C	
⑧⑧	○	○	D	
			E	
⑮	○	○	F	
⑨⑩	○	∅	G	
⑬	○	○	H	
			I	
⑦⑥	○	∅	J	
			K	
			L	
			中	M
④⑦	○	○	左	
⑦⑩	○	○	N	
④⑤	○	○	O	
			中	P
			左	
			中	Q
	○	∅	左	
④⑩	○	○	R	
			S	

「日盛會」 選句者名	ホトトギス誌 「俳諧散心」 抄録句	類題句集 草稿記号	類題句集 草稿朱点	「年代順虚子 句集」収録句
三允 松浜		イ		
			○	
三允 香村 水巴		ハ	○	○
ナシ		ニ		
ナシ		ホ		
		ヘ		
三允 東洋 水巴 城		ト	○	○
三允 東洋 水巴 城		チ	○	
		リ	○	
				○
		ヌ		
ナシ		ル	○	○
		ヲ		○

(注記)

一、「虚子出句控」(表中ならびに以下「句控」と略記する)中の句のうち、A・M・P・Qの各句については句形の異ったものがある、それらを右・中・左の如く區別して扱った(資料Ⅱ参照)

二、「句控」墨点欄中、G・J・Q左の各句には○の印が見えるが、そのうちG・Jの／はペン書きであることから当初無かったもので、後に施されたものと考えられる。従ってG・Jの／を考慮に入れなければ○点は「日盛會」句稿中のもとの一致することとなり、出句する際虚子が出句すべき句に施したものと考えられる。

三、「句控」朱点については意味するところ未詳である。

四、「自選類題虚子句集草稿」(表中ならびに以下「類題句集草稿」と略記する)中の記号と「句控」中の記号がその順を一にして  
 いることから、「類題句集草稿」は「句控」から抜き書きされたものと推定される。

五、『年代順虚子俳句全集』(表中ならびに以下『年代順虚子句集』と略記する)収録句に於て、「句控」中のSの句は上五を「關の

中に」と改作されている。また「講堂に僧集ふ時ほととぎす」なる一句が『年代順虚子句集』には収録されているが、この句形及び類似句はそれ以前に無い。強いて考えれば「句控」中のP及びFの句から合成されたものと言えるが、改作の時期等については未詳である。

#### 四、おわりに

三点の資料を紹介し、考察を試みたが、就中「日盛会句稿」からは、なお多くの問題点を指摘することができるかと思う。各人が出句だけでなく選句をも行っている訳であるから、例えば選句稿を仔細に検討することによって、各人の是とする句風を帰納的にある程度論証することも可能かと思う。機会を得て他の資料をも紹介しつつ本稿で触れ得なかつた問題も考察してみたく思っている。